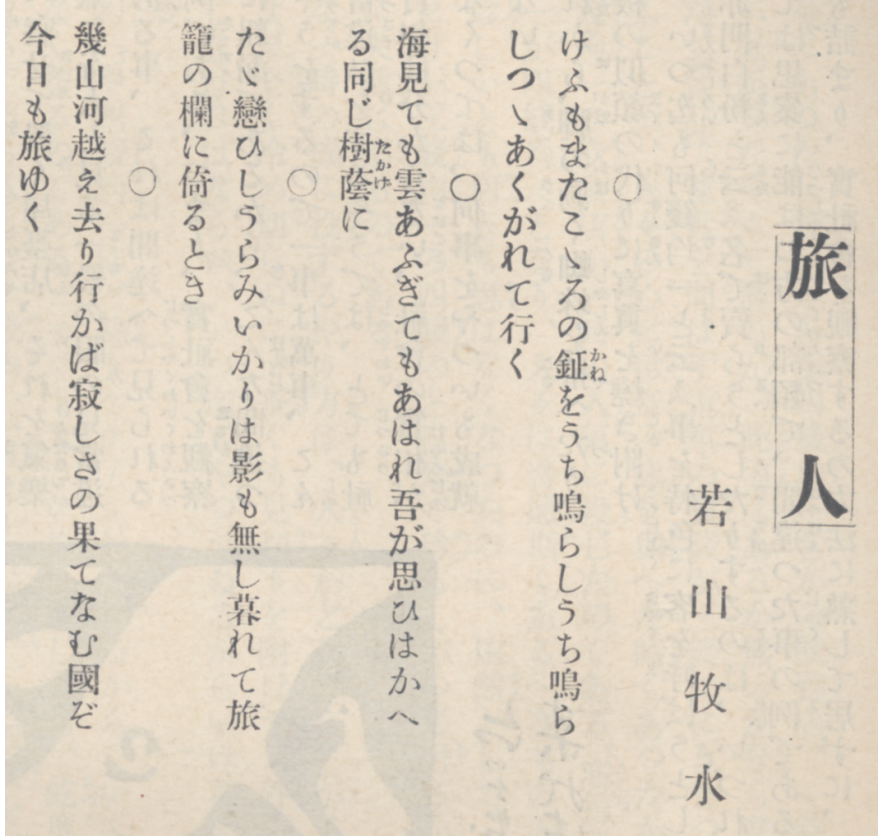




『新声』は明治29年に創刊された文学雑誌です。当時の若者に愛読され、文壇への登竜門となっていました。牧水も延岡中学時代から投稿を始めています。早稲田大学に入学した牧水は、選者の尾上柴舟門下として盛んに歌を発表します。明治40年8月号には、「旅人」と題して

幾山河越え去り行かば寂しさの
果てなむ國ぞ今日も旅ゆく
など15首が掲載されています。



参照／『若山牧水伝』



昭和39年建立

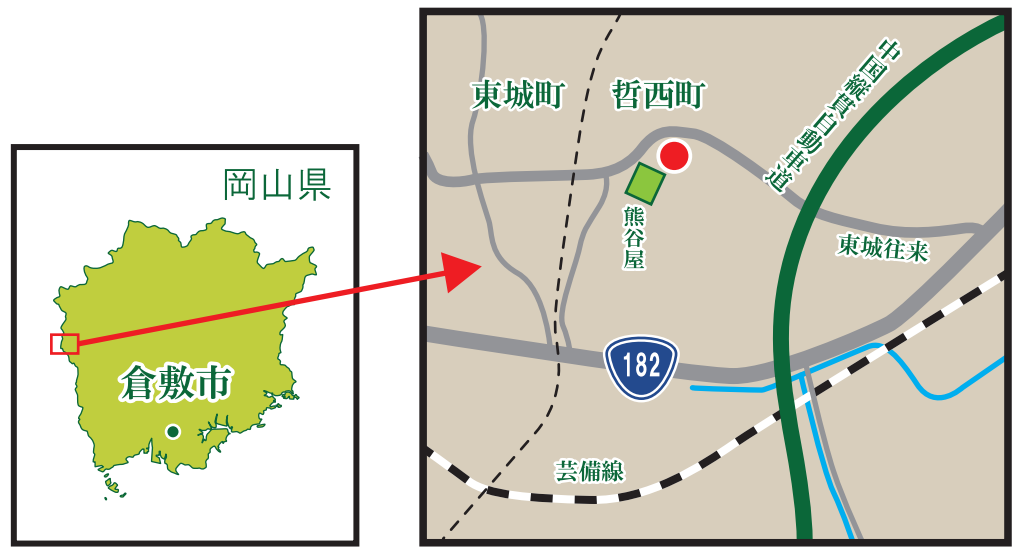
幾山河
こえさりゆかば
はて奈む国ぞ
けふも旅ゆく
牧水



平成19年建立

牧水は明治40年夏に帰省する際、神戸から陸の旅路を選びます。現在の岡山県新見市哲西町に入り、広島県との県境二本松峠で日没を迎えた牧水は、茶屋「熊谷屋」に泊まり、この旅を勧めてくれた友人有本芳水への葉書に、この歌を書きました。

後に熊谷屋が復元され、近くに歌碑が建立されます。同地には、喜志子や旅人の歌碑も建立されています。



参照／『牧水全国歌碑めぐり』

お待たせしました<(_)> 坪谷小コーナー設置



牧水の母校坪谷小学校が閉校して3ヶ月が経ちました。牧水先生をはじめ1,850名の卒業生を送り出した坪谷小学校に残された「ポスト文集」（短歌集）、「おすず」（作文集）、「卒業文集」他を文学館が預かりました。坪谷小149年の歴史を文学館が大切に引き継いでいきます。卒業生みなさん、地域みなさん、どうぞ手に取って当時を懐かしんでください。文学館はいつでも開放しています。隣近所誘い合ってどうぞお越しください。

●展示品	①ポスト文集 昭和62年度～ ②おすず 昭和42年度～ ③卒業文集 昭和57年度～ ④教育勅語戊申詔書 宮崎県東臼杵郡坪谷尋常小学校 ※外箱のみ ⑤若山牧水賞受賞歌人高野公彦、俵万智、坂井修一色紙 ほか
●展示場所	若山牧水記念文学館ギャラリー ※閲覧のみは入館料無料です
●開館時間	9:00～17:00 ※祝祭日を除く月曜日は休館です

締切迫る 第16回青の國若山牧水短歌大会作品募集

日向市、日向市教育委員会、当頭彰会主催の『第16回青の國若山牧水短歌大会』の応募締切が今月末に迫ってまいりました。初心者大歓迎です。多くの作品をお待ちしております。

募集部門	【一般の部 自由題、題詠『歌』】 全国どなたでも応募できます 【小・中・高校生の部】 県内の児童生徒が応募できます
応募締切	令和8年7月31日（金）

詳細は、若山牧水ホームページ、およびInstagramをご覧ください。



小田加奈子コンサート 今年も開催します

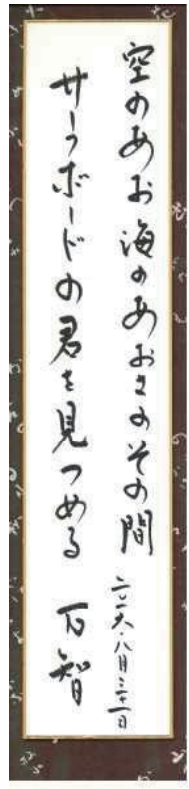
昨年、〈牧水生誕140年記念／文学館開館20年記念〉企画で開催した小田加奈子コンサートを今年も開催することが決定しました。古閑裕而作曲の「白鳥（しらとり）」の歌、「坪谷慕情」を今年も歌っていただきます。なお、今年は声優、FMひゅうがパーソナリティでおなじみ池田知聡（ともあき）さんに友情出演いただき、牧水の随筆を朗読していただきます。郷土の歌人若山牧水を郷土の歌手が歌うコンサート、牧水生誕の地へお誘い合わせの上どうぞお越しください。

日時	令和8年8月23日（日） 開場12:30 開演13:00
会場	若山牧水記念文学館
料金	前売り券 1,500円（当日券 2,000円） 小中学生 600円（当日券 800円）
主催	若山牧水記念文学館・日向若山牧水顕彰会

若山牧水全集（増進会出版社）月報より 再開 第4話

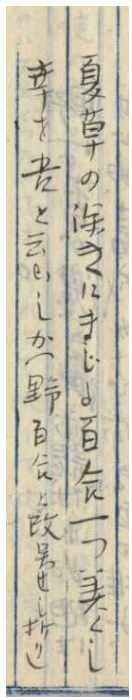
第2巻月報（1992・11） 5 白鳥の一首 俵 万智

白鳥は哀しからずや空の青海のあをにも染まらずたふふ
高校生のとき、この一首に出会って、すっかり牧水ファンになってしまった。すぐに覚えて愛唱していた。大学生になって、佐佐木幸綱先生の講義を聞いたことがきっかけで、私は短歌を作りはじめた。その講義で牧水がとり上げられたことがある。
話が、この有名な一首におよんだ。そして先生から投げかけられた質問に、どきつ。
「白鳥は一羽かな、それとも複数かな。そして空を飛んでいるのかな、あるいは波の上に浮かんでいるのかな。みんなは、どう思いますか？」
この歌に対して、自分が意外なほどあいまいなイメージしか持っていないのを感じさせられた。なんとなく二〜三羽を思い描いていたときもあるし、一羽っきりの図を想像していたときもある。そしてその図のなかでは、白鳥は飛んでいたり休んでいたり……。つまり定まったイメージというものを、決めずに愛唱していたというわけである。恥ずかしい話だ。
考えてみると、どちらなのだろう。もちろん、歌の言葉からは、どちらともとれる。
先生の解釈は「一羽が海に浮かんでいる」だった。群れていたのでは孤独感が薄れるし、飛んでいたのでは、視線の動きが大きすぎる、というのがその理由。なるほど、と思った。以来私の思い描く場面では、一羽が波間を漂っている。
たぶん、そのせいだろう。あるときボーイフレンドと海に出かけた私は、ふいに海岸で牧水のこの歌を思いだした。サーフボードに乗った彼が、一羽の鳥のように、波間を漂っていたのである。その場面を、本歌取りで表現してみたいと思った。もちろん、本歌は牧水の「白鳥は……」である。
空の青海のあおさのその 間 サーフボードの君を見つめる
本歌のイメージを借りて、彼が鳥のように見えた感じが伝えられれば、と思った。また、「哀しからずや」という問いかけを、白鳥ならぬこのときの彼に、私もしてみたかったのかもしれない。（歌人）



ちょうど10年前になるようです。右は、伊藤先生と俵万智さんがラジオ収録で文学館を訪れた際に俵さんに書いていただいた短冊です。（『青の国ラジオ紀行～俵万智×伊藤一彦 牧水忌によせて～』MRT ラジオ 2016. 8. 31）本歌取りだなぁ程度の読みでしたが、こんな物語が背景にあったのですね。
次回は第2巻月報（1992・11） 6 牧水の思い出（上） 鈴木 秋灯 を予定します。なお、表題前の数字は文学館だより掲載上連番とさせていただきます。

牧水先生の一首 折に触れて出会う一首を紹介しています



夏草の深きにまじる百合一つ美しく幸を吾と言ひしか
（野百合と改号せし折り）
なつくさの ふかきにまじる ゆりひとつ うつくしさを われといいしか

この歌は、牧水が延岡中学校（現宮崎県立延岡高等学校）5年生の時に詠み、明治36年発行の回覧雑誌「曙」12号に掲載されたものである。歌集には収められていない。左は当文学館収蔵の前掲「曙」12号に載る「夏草の深きにまじる…」である。万年筆であろうか、18歳当時の牧水直筆が残る大変貴重なものである。
牧水と書いたが…。この歌の終わりに（野百合と改号せし折り）と付されている。牧水は、「牧水」と名乗るまでに雅号を複数回変えていることを紹介しておきたい。
「紅雲」「秋空」「桂露」「雨山」 延岡中学校3年生当時
「白雨」 延岡中学校4年生当時
「野百合」「牧水」 延岡中学校5年生当時
「牧水」という雅号は、延岡中学校5年秋頃から生涯変わることはなかった。
参照『若山牧水全歌集 伊藤一彦編』

予告

当文学館において、牧水メモリアルイヤーズ記念企画展「牧水43年の生涯～没後100年の軌跡を辿る」第4期『早稲田の牧水』がいよいよ8月5日（水）から始まります。北原白秋との出会い、第1歌集『海の声』発行の経緯ほかを、平賀春郊宛に送った牧水の書簡（直筆複写）を用いながら紹介、展示していきます。楽しみにお待ちください。【開催期間 令和8年8月5日（水）～12月27日（日）】

夏草の深きにまじる百合一つ
美しく幸を吾と言ひしか
（野百合と改号せし折り）
牧水

企画展『牧水43年の生涯』
～没後100年の軌跡を辿る～

第4期「早稲田の牧水」

【会期】8月5日（水）～12月27日（日）
【会場】企画展示室

令和7年（生誕140年）から令和10年（没後100年）までを牧水メモリアルイヤーズとして、記念企画展を開催しています。
8月からは第4期「早稲田の牧水」を開催します。早稲田大学進学のために上京した牧水と文学仲間との交流や文学活動について、友人平賀春郊宛書簡をもとに紹介します。合わせて、盟友北原白秋との交流や第1歌集『海の声』発行経緯、同郷日高秀子との交流なども紹介します。

【展示資料から】「早稲田の三水」



明治37年10月12日撮影。この頃、大学の同級生で親しかったのは北原白秋と、中林蘇水でした。当時、白秋は「射水」と号し、三人とも「水」のつく雅号なので、自ら「早稲田の三水」と称していました。

＜牧水の日記 10月20日から＞
夜、射水氏と去日の写真を受取に行く。われは肥えずぎて子供らしく、射水氏は痩せずぎて老人らしく、兩人句あり、「自惚れは写真屋までの命かな」。独り蘇水氏は羨望の的となれりき。
※参照『若山牧水全集』（増進会出版社）

若山牧水記念文学館

〒888-0211 宮崎県日向市東郷町坪谷1271番地



【利用案内】
■利用案内■
【開館時間】9:00～17:00（入館は16:30まで）
【休館日】月曜日（祝日は除く）年末年始（12月29日～1月3日）
【入館料】小・中学生100円 高校生以上310円（20名以上の団体は2割引）
【お問合せ】TEL 0982-68-9511 FAX 0982-68-9512【公式HP】https://www.bokusui.jp